第34回　セミナー：子どもの育ちを考える

「保育における自然環境の意味とかかわりの実際 ～SDGs時代に考えたいこと～」

2022年2月5日

岐阜聖徳学園大学
松本信吾

1

今日の話の流れ

1：幼児にとっての自然の意味

2：自然とのかかわりの実際

3：自然とのかかわりを支える保育者の援助

4：SDGs時代の保育を考える

2

1．幼児にとっての自然の意味

保育においてなぜ自然とかかわることが大事なのか？

はじめに皆さんに質問します。

Q1．保育において「自然」は大事ですか？

<u>どうして</u>、大事（大事ではない）ですか？

3

■答えの例？

○「自然体験」の意味としてよく言われることは

・豊かな感性が育つから

・科学的思考が育つから

・生命への畏敬の念が育つから

・身体能力が向上するから　などなど

4

（ちなみにこんな風に書いてある・・・）

〇幼稚園教育要領（保育所保育指針）「環境」の「内容の取り扱い」には

幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、 不思議さなどに直接触れる体験を通して、子どもの心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、 子どもが自然との関わりを深めることができるよう工夫すること。

5

遊び込むこと（幼稚園教育要領解説ｐ34、
幼保連携型認定こども園教育・保育要領ｐ35より）

（乳）幼児期の生活のほとんどは、遊びによって占められている。遊びの本質は、人が周囲の事物や他の人たちと思うがままに多様な仕方で応答し合うことに夢中になり、時の経つのも忘れ、その関わり合いそのものを楽しむことにある。すなわち遊びは遊ぶこと自体が目的であり、人の役に立つ何らかの成果を生み出すことが目的ではない。しかし、幼児の遊びには幼児の成長や発達にとって重要な体験が多く含まれている。

6

遊び込むこと（保育所保育指針解説より）

遊びには、子どもの育ちを促す様々な要素が含まれている。子どもは遊びに没頭し、自ら遊びを発展させていきながら、思考力や企画力、想像力等の諸能力を確実に伸ばしていくとともに、友達と協力することや環境への関わり方なども多面的に体得していく。ただし、（略）遊びは、それ自体が目的となっている活動であり、遊びにおいては、何よりも「今」を十分に楽しむことが重要である。子どもは時が経つのも忘れ、心や体を動かして夢中になって遊び、充実感を味わう。そうした遊びの経験における満足感や達成感、時には疑問や葛藤が、更に自発的に身の回りの環境に関わろうとする意欲や態度の源となる。

7

矢野智司の遊びのとらえ

- 子どもは発達するために遊んでいるのではない。
- 遊びを手段だと考えるのであれば、遊びは他のもに取って代われることになる。
- 有用性や生産性を否定するのが遊びの原理

〇遊びの本質＝遊ぶ事以外の目的がない。
遊ぶこと自体が「目的」　⇔遊びは「手段」

〇「遊び込む」ことで、世界に深く溶け込み、時間や空間を超えて世界と一体化する「溶解体験」が生まれる。
⇒物や人との全面的なかかわりを取り戻す
⇒世界への根源的な信頼感や安心感
（「幼児教育の独自性はどこにあるのか」矢野智司，2005）

8

「遊び込む」こと

（過去）　（今・ここ）　（未来）

目的 ⇨ 過程 ⇨ 結果

到達目標（教育目標）　手段（遊び）　成果（育ち・効果）

※これだと、今が常に「手段」となる。
（遊び込めない・充実しない）
※今の時代は、過程（プロセス）が失われている。

9

遊び込むこと

（過去）　（今・ここ）　（未来）

目的 ⇨ 過程 ⇨ 結果

方向目標　（目的）
→「今、ここ」で遊び込む（プロセス）
→結果としての成果

10

幼児期の教育

⓪　環境：懐の深い環境（心動かされる環境）
①　感情体験：心動かされる体験
　安心感、興味・関心、必要感（自分ごと）
②　直接体験：環境との相互作用
　「今・ここ」の遊び・生活
③　感情体験：「充実感」「満足感」を味わう
　→さらなる意欲①へ
　⇒味わえないときは、環境の再構成⓪へ

④（結果としての）育ち・学び　《例：子どもの心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われる》

11

自然の意味を考える前に

- 「遊び」は本来、無目的で、「時間」や「効率」「成果」にしばられず、「今・ここ」での遊びが充実（対象との深い対話「溶解体験」）プロセスの中に、喜びや意味が含まれている。

⇒そこから、結果としての最大の育ち、学び

- 「自然」とかかわることで何かを身につけさせようとする態度では、子どもは心動かすことを邪魔され、夢中になりにくいのではないか

12

Q2.自然物を使った遊びと人工物を使った遊びの特徴を考えてみよう

■両者にどのような違いがあるだろうか。自然物を使った遊びと人工物を使った遊びを対比させながら、その環境の意味の特徴を書き出してみよう。

自然物を使った遊び：砂や土、水で遊ぶ。葉っぱや花、木切れで遊ぶ。小動物とかかわって遊ぶなど。

人工物を使った遊び：積み木、固定遊具、粘土、クレパス、ボール、折り紙などを使って遊ぶなど。

13

自然物	人工物
【自然界のもっている原理・原則】	
• 同じものが一つもない（多様性）	・規格化されている
• 時間と共に変化する（循環性）	・変化しにくい
• 捨ててもゴミにならない（循環性）	・使ったらゴミになる
• 命とのかかわりがある（有限性）	・生命とのかかわりがない
• 金がかからない	・金がかかる
【そこからもたらされる環境としての意味】	
• ありのままに存在できる（安心感）	・「べき」を求められがち
• 意味が規定されておらず、思うままに扱える（自由感）	・意味が規定されがちで、禁止・制約がされがち
• それぞれのかかわり方が可能（多様性）	・単一のかかわり方になりがち
• 五感を通して豊かに反応（応答性）	・限られた反応になりがち

14

幼児期にふさわしい懐の深い環境（＝夢中になって遊び込める環境）とは

○安心感のある環境：安心してかかわっていける人や対象。居場所があり落ち着ける空間や時間。

○自由感のある環境：自由にかかっていける対象、それを許す人、こと（状況）。

○多様性のある環境：多様なかかわり方が保障され、様々な使い方や表現ができるもの。様々な感じ方の人。多様な自己発揮（表現）を許す状況。

○応答性（手応え）のある環境：かかわりに対して豊かに反応する対象。それを共感する人。

⇒それって、（まずは）自然じゃろ！
（人・人工物のキャパシティの限界）

15

ESD「持続可能な社会づくりの構成概念」

⇒自然界のもっている原理・原則を示している

	①多種多様な要素からなる視点	②互いに作用し合う視点	③ある方向へ変化している視点
人を取り巻く環境に関する概念	「多様性」 いろいろある	「相互性（循環性）」 関わりあっている	「有限性」 限りがある
人の意思や行動に関する概念	「公平性」 一人一人大切に	「連携性」 力を合わせて	「責任性」 責任を持って

16

（改めて）「自然」と「人工」

- 私たちが避け無くそうとしてきた、不潔で不便で不快で不足の世界。（4つの不）
- 不思議（思いを超えた）の世界
- 身体で感じる世界
- そのものに一体化する世界（感じる・なりきる）

- 「科学」や「理性」によって作ってきた、清潔で便利で快適で充足された人間の都合に合わせた世界
- 思議（意味・意図・計画・分析）の世界
- 言語で考える世界
- 対象化して離れて見る世界（図鑑的知識）

17

（改めて）「自然」と「人工」

- 偶然の中で出会う、プロセスを大事にする世界
- 自分の「内なる自然」と響き合う世界
- ありのままの命が、そのままで受容される、無分別でつながる世界
- 世界に対する愛を育む

⇒「自然」＞「人間」

- 計画通りに進め、結果を重視する世界
- 情報過多で潤いがなく疲れる世界
- 利用概念で分別で排除、分断する世界
- 人間中心、コントロール

⇒「自然」＜「人間」

18

【１のまとめ①】

- 「自然」は、乳幼児期にふさわしい「心動かされる豊かな環境」を提供

⇒「遊び込む」経験の保障

⇒満足感や達成感⇒更に自発的に身の回りの環境に関わろうとする意欲や態度

⇒（結果としての）様々な育ち・学び

19

【１のまとめ②】

- 「自然」は、私たちが生きている世界の「原理・原則」を体現している

⇒「原理」に合っていることの心地よさ（世界との一体感、つながり）

⇒ 「原理」 から外れていることの不自然さへの気付き

⇒私たちを照らし、立ち返らせるものとしての意味

20

2．自然とのかかわりの実際

（1）自然とのかかわりにはどのような対象があるか

自然と言っても、様々な対象が考えられ、
子どもたちは様々な自然とかかわっている。

Q3. 自然にはどのような種類があるか考えてみよう。

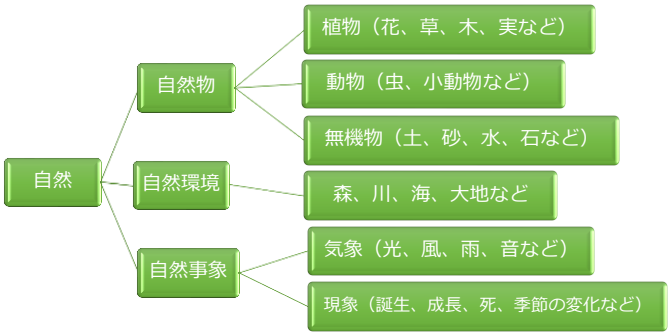
21

環境の分類

［自然(的)環境］	［社会(的)環境］
A. 非生物的環境 土、山、川、海、生活空間、大気、天体、宇宙	C. 人的環境 家族、保育者、友人、近隣仕会、国際社会
B. 生物的環境 森林、植物（草花）、動物（小動物） 微生物	D. 文化的環境 幼児文化、生活様式、絵本、遊び、 芸術、制度、TV、ゲーム、雰囲気
	E. 物(質)的環境 施設、遊具、生活用品、玩具

22

自然の分類



23

（2）自然とのかかわりを広げるために

○安心感のある環境：安心してかかわっていける人、もの。居場所があり落ち着ける時間、空間。

○自由感のある環境：自由にかかっていけるもの、それを許す人、こと（状況）。

○多様性のある環境：多様な種類があり、様々な使い方や表現ができるもの。様々な感じ方の人。多様を許す状況。

○応答性（手応え）のある環境：豊かに反応するもの。それを共感する人。

24

（２）自然とのかかわりを広げるために

〇園の自然環境を見直してみる（安心感、自由感、多様性、応答性）

・（保育者も）安心してそこで遊べる？

・花壇？・雑草？　・水や泥で遊べる？　・かかわる道具はある？

〇身近な園外にも目を向ける（多様性・自由感）

・公園・散歩道・河原や雑木林など。ただ、出かけるだけでなく、散歩そのものの中にどれだけ自由が保障されているか。

〇詳しい人の力を借りる（保育者にとっての世界の広がり）

・広島県自然体験活動アドバイザー（無料で呼べます）

https://www.pref.hiroshima.lg.jp/soshiki/244/sizentaikenkatudouadobaiza-.html

25

（２）自然とのかかわりを広げるために

・身近にある自然物、自然環境、自然事象との出会いがもてる機会をつくる。

〇**ある環境を活かす**⇒保育者が気づきを促したり、出会う機会を保障することで出会っていくものもある。←保育者自身が自然に開かれていること。

〇**ない環境を保障する**⇒

1）土や砂遊び場　2）水遊び場

3）菜園や花壇　4）芝生地や雑草地

5）樹木やつる性植物　6）飼育動物

「子どもの経験をより豊かに　園庭の質向上のためのひと工夫へのいざない」
東京大学大学院教育学研究科附属 発達保育実践政策学センター
http://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/event/15206/

26

（２）自然とのかかわりを広げるために

・子どもの発見を、受け止めると共に周りに広げていく。保育者より子どもの方が発見することが多い。

・地域環境まで含めて出会いを保障する。

・諸感覚（五感）を用いて自然と出会っていけるように。

・行事や文化など、子どもからは生まれてこないものを子どもの生活の中に取り入れていくことも大事。

27

Q4．これから活用していくことができそうな自然の対象を考えよう

・自らのフィールドで、現在使っていなくてこれから活用していけそうな、園庭や地域の自然の対象を考えてみよう。

・植物、動物、無機物、自然事象、こと的環境（ルール）など、広く考えてみることで、今まで眠っていた自然環境が見えてくるかも。

・園として今後、活用できそうな自然の対象についてや、どのような使い方ができるか、かかわりを広げるための道具を用意できるか、ルールを見直せるかなどについて、園のみんなで考えを出し合うことも有効。

28

【２のまとめ】

・まずは、保育観、子ども観が大事。何を大事にしたいのか。
・子どもたちがかかわることのできる自然環境を、自園の状況を踏まえながら広げていこう。その際、様々な自然物、自然環境、自然事象と、かかわる対象を広く捉えていこう。
・このようなかかわりは認めていこう、このような道具は使えるようにしようなど、園としての共通理解を広げていくことで、子どもたちのかかわりを広げていくことが大事。
・自分一人でできること、保育者のチームとして取り組めること、園全体で長期の見通しをもって取り組むことなど、幅広く考えてみてください。

29

3.子どもと自然とのかかわりを支える保育者の援助

○要領・指針「環境」の「内容の取り扱い」には

幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、 不思議さなどに直接触れる体験を通して、子どもの心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、 子どもが自然との関わりを深めることができるよう工夫すること。

■子どもが自然とのかかわりを深めていく過程を支える保育者の援助とは？

30

子どもと自然とのかかわりを深める保育者の援助のポイント

(1) 時間、空間、仲間、隙間を保障しよう

(2) 自ら環境に心を開き、子どもが感じていることを受け止めよう

(3) 環境との対話の深まりを支え、共に楽しもう

(4) 多様性や循環性を大事にしよう

31

(1)時間、空間、仲間、隙間を保障しよう

・子どもたちが、大きさ、不思議さなどのセンス・オブ・ワンダーを働かせるためには、じっくりとかかわる時間や、出会うことのできる空間が必要。
・時間や空間が保障されていても、かかわる自由が保障されていないと、子どもたちはかかわることができない。また、意味がなさそうな隙間がないと、活動が決まってしまう。
・危険と思うことを全て排除したら、遊びにならない。

32

「センス・オブ・ワンダー」より

・子どもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激にみちあふれています。残念なことに、わたしたちの多くは大人になるまえに澄みきった洞察力や、美しいもの、畏敬すべきものへの直感力をにぶらせ、あるときはまったく失ってしまいます。もしもわたしが、すべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力をもっているとしたら、世界中の子どもに、生涯消えることのない“センス・オブ・ワンダー ＝ 神秘さや不思議さに目をみはる感性”を授けてほしいとたのむでしょう。

33

「センス・オブ・ワンダー」より

・わたしは、子どもにとっても、どのようにして子どもの教育をすべきか頭を悩ませている親にとっても「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではないと固く信じています。

・子どもたちがであう事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生み出す種子だとしたら、さまざまな情緒やゆたかな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土地を耕すときです。

↑幼児期の教育（保育）の意味

34

※（参照）リスクとハザード

「都市公園における遊具の安全確保に関する指針（改訂第２版）」平成２６年　国 土交通省

①リスク：事故の回避能力を育む危険性、あるいは子どもが判断可能な危険性

リスクは、遊びの楽しみの要素で冒険や挑戦の対象となり、子どもの発達にとって必要な危険性は遊びの価値のひとつである。子どもは小さなリスクへの対応を学ぶことで経験的に危険を予測し、事故を回避できるようになる。また、子どもが危険を予測し、どのように対処すれば良いか判断可能な危険性もリスクであり、子どもが危険を分かっていて行うことは、リスクへの挑戦である。

②ハザード：事故につながる危険性、あるいは子どもが判断不可能な危険性

ハザードは、遊びが持っている冒険や挑戦といった遊びの価値とは関係のないところで事故を発生させるおそれのある危険性である。また、子どもが予測できず、どのように対処すれば良いか判断不可能な危険性もハザードであり、子どもが危険を分からずに行うことは、リスクへの挑戦とはならない。

35

(1)時間、空間、仲間、隙間を保障しよう

・子どもたちが、大きさ、不思議さなどのセンス・オブ・ワンダーを働かせるためには、じっくりとかかわる時間や、出会うことのできる空間が必要。

・時間や空間が保障されていても、かかわる自由や自分で選べる何もしない隙間が保障されていないと、子どもたちはかかわることができない。（4間の保障）

・大人の都合や管理と子どものかかわる自由をどこで線引きするかを園全体で考えていこう。

・自由を保障するための保育者の知識。リスクとハザード。安全点検。

36

(2)自ら環境に心を開き、子どもが感じていることを受け止めよう

・「妖精の力にたよらないで、生まれつきそなわっている子どもの『センス･オブ･ワンダー』をいつも新鮮にたもちつづけるためには、わたしたちが住んでいる世界のよろこび、感激、神秘などを子どもといっしょに再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が、すくなくともひとり、そばにいる必要があります。」

↑

・これが、保育者の大事な仕事

・そのためには、保育者自身が環境に開かれ、「センス・オブ・ワンダー」を感じる人である必要

37

(2)自ら環境に心を開き、子どもが感じていることを受け止めよう

・「泣いている子がいる。涙を拭いてやる。泣いてはいけないという。なぜ泣くのかと尋ねる。弱虫ねえという。・・・随分いろいろなことはいいもし、してやりもするが、ただ一つしてやらないことがある。泣かずにはいられない心もちへの共感である。お世話になる先生、お手数をかける先生、それは有り難い先生である。しかし有り難い先生よりも、もっとほしいのはうれしい先生である。そのうれしい先生はその時々の心もちに共感してくれる先生である」（倉橋惣三「育ての心」より）

38

(3)環境との対話の深まりを支え、共に楽しもう

・「もっとやってみたい」「どうなるんだろう」などの心の動きを満たすことができるように。つまりは、「遊び込む」ことを支える。

・そのためには、見守る、一緒に考える、一緒にやってみる、友達のやり方に気付いたり、一緒にやったりすることができる援助をする、気づきを促す、モデルになる、アイデアを出す、道具を出す、など、実に様々な援助が考えられる。（私たちは、子どもを見るプロ。そこでの応答性、再構成力が問われる）

・生活（くらし）を通した必要感の中から、ものへの関心や対話は生まれてくる。

39

(4)多様性や循環性を大事にしよう

・多様性や循環性に気付いたり、それらを活かした活動ができるようにする。

・子どもたち一人一人の多様な感じ方、かかわり方、表現が保障できるようにする。私たち人間も含め、多様なものが存在するからこそ豊かな世界になることを、「心地よさ」や「面白さ」「親しみ」という感覚を伴って味わっていけるように。

・自分がつながりの輪の中にいることを感じられるるように。

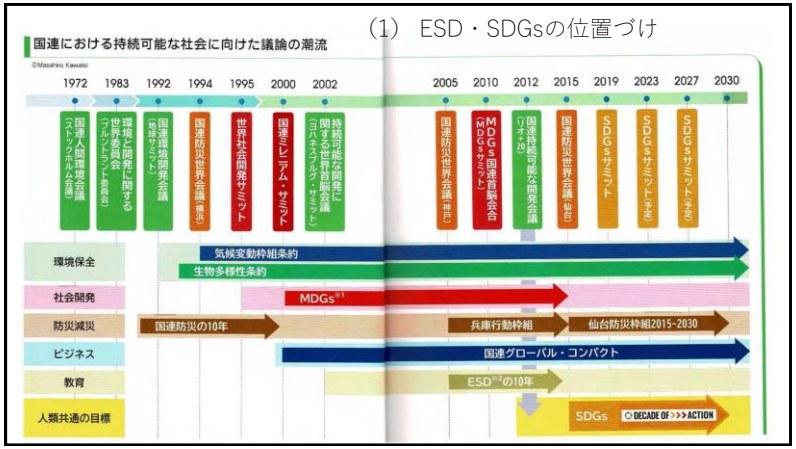
40

4．SDGs時代の保育を考える

（1）ESD・SDGsの位置づけ
（2）私たちが迎えている時代と保育との関係
（3）私たちに課されている「持続可能な社会の担い手」の育成

41

（1）　ESD・SDGsの位置づけ



42

日本のESDの動き

ユネスコの動向	幼児教育・保育の国内動向
1987年 ブルントラント会議『我ら共通の未来』 持続可能な開発が定義	
1992年 地球サミット『アジェンダ21』 持続可能性が教育へ	
2005年～2014年	2014年
国連ESDの10年 世界的にESDの普及・啓発	『環境教育指導資料【幼稚園・小学校編】』 自然体験・環境保全の必要性を強調
2015年～2019年	2017年
GAP（Global Action Programme on ESD） 2016年　SDGs（Sustainable Development Goals）スタート	『学習指導要領・幼稚園教育要領』前文 「持続可能な社会の創り手」の文言追加
2019年～2030年 ESD for 2030	

持続可能性をめぐるユネスコの動向と幼児教育・保育の分野の国内動向

43

○幼稚園教育要領の「前文」には

「一人一人の幼児が，将来，自分のよさや可能性を認識するとともに，あらゆる他者を価値のある存在として尊重し，多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え，豊かな人生を切り拓き，持続可能な社会の創り手となることができるようにするための基礎を培うことが求められる」

☞「持続可能な社会の担い手となる」という、現代の課題

⇒では、どうやってそれを実現していくのか？

44

（2）私たちが迎えている時代

①グローバル化・多様化

②AI社会化・ Society 5.0 ・ IoT

③貧困問題・環境問題などの深刻化

・保育（教育）において、「不易」と「流行」の両方の観点から、これらの問題をどのように捉え、考えていけばよいかが問われている。

45

SUTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

46

保育とSDGsは関係あるの？

①グローバル化・多様化

・グローバル化、多様化が進む中で、保育の場は、本当に一人残らず、誰もがそのままで尊重される場を築いているだろうか？

・保育者が、子どものすることを決めて、押しつけていないだろうか？一人一人が生活の主体者として参画する場となっているだろうか？

・男の子のだから、女の子だから、〇歳児だから、と従来の保育観を振りかざしていないだろうか？

47

①グローバル化・多様化

人や国の不平等をなくそう

ゴールターゲット10.2

• 2030 年までに、年齢、性別、障害、人種、民族、出自、宗教、経済的地位やその他の状況 にかかわらず、すべての人々に社会的・経済的・政治的に排除されず参画できる力を与え、 その参画を推進する。

48

①グローバル化・多様化

ジェンダー平等を実現しよう

ゴールターゲット5.5

- 政治、経済、公共の場でのあらゆるレベルの意思決定において、完全で効果的な女性の参画と平等なリーダーシップの機会を確保する。

49

①グローバル化・多様化の中での、一人一人の権利の保障に向けて

- 人の顔が見える関係性の中で、確かなつながりを感じ、支え合う保育
- 特別な支援がいるとされる子どもも含め、多様さが大事にされ、多様であることを大事にする場を作る保育
- 子どもが権利の主体者として、生活の中での意志決定に参画していける保育（大人≦子ども）

⇒社会を自らの手で創る経験の保障

50

保育とSDGsは関係あるの？

②AI社会化・ Society 5.0 ・ IoT

・AI社会を必然的に迎えるからこそ、幼児期に大事にしたいもの、欠かせないものを考えてるか？
・幼児期にこそ必要な経験を、きちんと保障できているか？
・生きる意味を感じられる手応えのある生活を保障できているだろうか。？

51

②AI社会化・ Society 5.0 ・ IoT

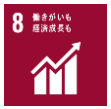
質の高い教育をみんなに

ゴールターゲット4.2

- 2030 年までに、すべての少女と少年が、初等教育を受ける準備が整うよう、乳幼児向けの質の高い発達支援やケア、就学前教育を受けられるようにする。

52

②AI社会化・ Society 5.0 ・ IoT



働きがいも 経済成長も

ゴールターゲット8.3

- 生産的な活動、働きがいのある人間らしい職の創出、起業家精神、創造性やイノベーションを支援する開発重視型の政策を推進し、金融サービスの利用などを通じて中小零細企業の設立や成長を促す。

53

②AI社会化・ Society 5.0 ・ IoTに向けて

- ＡＩでは経験できない、五感を通した直接体験やホンモノ体験を豊かに保障する保育
- 人とかかわることに喜びを感じ、必要感の中でコミュニケーションを取り合う保育
- 自分の手で作り上げる手応えを感じられる保育

⇒「これこそが人間にとっての喜び」という、人としての原体験の保障、価値観の醸成

54

保育とSDGsは関係あるの？

③貧困問題・環境問題などの深刻化

・貧困問題や環境問題に関して、保育者はどの程度理解し、関心をもっているか？
・子どものウェルビーイングは、本当に保障されているだろうか？
・環境問題をどう理解し、では幼児期にはどのようなことを身につける必要があるか？

55

③貧困問題の深刻化

貧困をなくそう

ゴールターゲット1.3

- すべての人々に対し、最低限の生活水準の達成を含む適切な社会保護制度や対策を各国で実施し、2030 年までに貧困層や弱い立場にある人々に対し十分な保護を達成する。

56

③貧困問題に向けて

- 貧困とは、「健康で文化的な最低限の生活」を奪われている状態、ウェルビーイング十分にが満たされていない、ととらえられる

⇒子どもにとって、安心して過ごしながら、充分に外の世界と対話できる場を保障

ex)外遊びが保障できている、絵本環境が満たされている→幼児期に必要な、健康で文化的な最低限度の生活の保障⇒満たされた経験をした人は、次なる世代にも満たされる経験を保障しようとするはず。

57

③環境問題の深刻化

陸の豊かさも守ろう

ゴールターゲット15.9

- 2020 年までに、生態系と生物多様性の価値を、国や地域の計画策定、開発プロセス、貧困削減のための戦略や会計に組み込む。

58

③環境問題の深刻化

私たち人類に待ったなしの問題

・グレートアクセラレーション
・プラネタリー・バウンダリー
・エコロジカル・フットプリント

59

グレートアクセラレーション

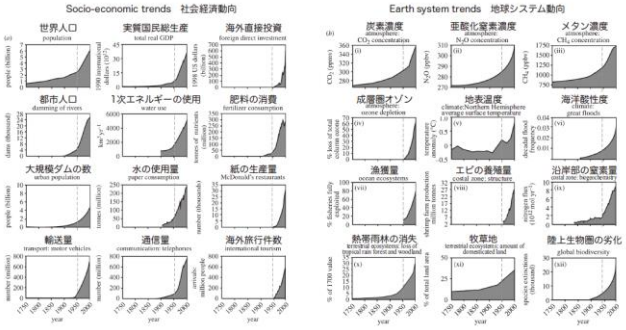


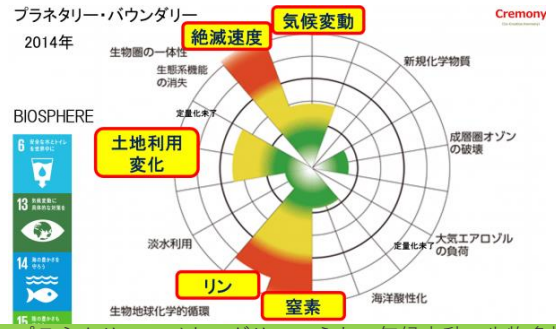
図12-4　グレート・アクセラレーション（人類活動の大いなる加速）
1950年以降，ヒトの社会経済活動も地球システムも急激に変化している
出所：Steffen, W., et al.（2015）. The trajectory of the Anthropocene : The Great Acceleration. *Review Article. 2015* をもとに筆者作者。

60

プラネタリー・バウンダリー

- プラネタリー・バウンダリー：地球の環境容量を科学的に表示し、地球の環境容量を代表する9つのプラネタリーシステム（気候変動、海洋酸性化、成層圏オゾンの破壊、窒素とリンの循環、グローバルな淡水利用、土地利用変化、生物多様性の損失、大気エアロゾルの負荷、化学物質による汚染）を対象として取り上げ、そのバウンダリー（臨界点、ティッピング・ポイント）の具体的な評価を行ったもの。

61



- ９つのプラネタリー・バウンダリーのうち、気候変動、生物多様性の損失、地球規模の土地利用の変化、窒素と淡水域におけるリンの４つの限界値を超えてしまい、既に危険域に入っている

62

エコロジカル・フットプリント

- エコロジカルフットプリントとは、私たちヒトの活動が地球環境に掛けている負荷の大きさを図る指標
- 人類が使用する資源を再生産、及び廃棄物の浄化に必要な面積を表している

- 地球に生きるヒト全員が、今の日本の平均的な暮らしをすると、資源の消費とCO_2排出をまかなっていくためには、約地球2.9個以上の生物生産力が必要とされる

⇒明らかに地球のキャパを超えた暮らし

◎私たちは、「人新世」に踏み込んだ

63

「人新世（じんしんせい・ひとしんせい）」

- 「人新世」：「人間の新たな時代」の意
- 人新世の特徴は、地球温暖化などの気候変動、大量絶滅による生物多様性の喪失、人工物質の増大、化石燃料の燃焼や核実験による堆積物の変化などがあり、人類の活動が原因とされる

※これらのことが問われているのは誰？
　後で困るのは誰？

64

③環境問題に向けて

- 待ったなしの環境問題、世界の現在を、少なくとも保育に携わる人間は知っておく必要があり、無視することはできない。

⇒「持続可能な社会の担い手」と自らがなる必要

⇒「持続可能な社会の担い手」を育む必要

- では「持続可能な社会の担い手」になるための幼児期のESDをどう考えていけばよいのか？

⇒幼児期のESDの意味を考える必要性

65

（3）私たちに課されている「持続可能な社会の担い手」の育成

〇幼児期：一般に，幼児期は自分の生活を離れて知識や技能を一方向的に教えら れて身に付けていく時期ではなく，生活の中で自分の興味や欲求に基づ いた直接的・具体的な体験を通して，人格形成の基礎となる豊かな心情， 物事に自分からかかわろうとする意欲や健全な生活を営むために必要な 態度などが培われる時期であることが知られている。

〇エコフォビア（自然恐怖症）「足もとの自然から始めよう（デイヴィド・ソベル著）」

- 現実の恐怖を伝えても恐怖症になってしまうだけ。子ども時代はエコフォビアではなくて「エコフィリア（自然に対する愛着心）」を大事にしよう。

66

（3）私たちに課されている「持続可能な社会の担い手」の育成

・SDGs・ESDに関して、幼児にとっての意味を考える必要性。

⇒これからの時代も踏まえて、必要な経験を！

⇒「不易」の「流行」の中での位置づけ。

〇活動の先取りでなく、幼児期にどのような心を育てることが、「自分ごと」として、周りとかかわっていく態度を育むのかを、保育者が理解して、保育をする必要があるのでは。

例）自分の全身で対象と深く関わり、その対象を愛していく体験

友達と一緒に自分たちの生活を作っていく体験

67

（3）私たちに課されている「持続可能な社会の担い手」の育成

〇問われているのは、子どもに接している大人である私たち。

幼児に行動を押しつける前に、幼児を目の前にしている私たち保育者が、その意味を理解し、消化し、行動できる人になる必要性があるのでは。

・人工の世界だけで生きていないか、「人間」＞「自然」になっていないか、子どもの自由を保障しているか、という振り返り

・子どもの権利や多様性、自分ごととして遊び生活することを保障する保育を行っているか

・限界を迎えている環境問題を、少しでも自分ごととして捉えようとしているか。

⇒身近な大人の態度が、結果として子どもたちに伝わっていく。

68

4. SDGs時代の保育のまとめ

不易

- 幼児期だからこそ必要な直接体験、ホンモノ体験を大事にする。
- 一人一人の人権を大事にし、生活づくりに参画する保育を行う。
- 「人としての喜び」が感じられる原体験を保障する。
- 何かを身につける「手段」としてではなく、「今・ここ」のウェルビーイング（安心感）と夢中になって遊び込むこと「目的」を保障する。

69

4. SDGs時代の保育のまとめ

不易

- 幼児期だからこそ必要な直接体験、ホンモノ体験を大事にする。
- 一人一人の人権を大事にし、生活づくりに参画する保育を行う。
- 「人としての喜び」が感じられる原体験を保障する。
- 何かを身につける「手段」としてではなく、「今・ここ」のウェルビーイング（安心感）と夢中になって遊び込むこと「目的」を保障する。

流行

- 「持続可能な社会の担い手」となるための保育について考え、幼児期のESDを意味づけ、実践する。（「多様性」「循環性」などの理解の深化）

70

Q5. 自分の保育観、自然観を見つめ直そう

今回の研修（1. 自然の意味、2. 自然とのかかわり、3. 保育者の援助、4. SDGs時代の保育を考える）を受けて、今後の保育で大事にしていきたいことや取り入れていきたいことを箇条書きで書いてみよう。

できれば、この学びを園に持ち帰り、園としての保育観、自然観を語り合う機会になっていただけると嬉しいです。

71

◇ありがとうございました

追って質問などがある方は
shingom@gifu.shotoku.ac.jp
までお願いします。

本日の内容は、次の本に詳しく書かれています。

「身近な自然を活かした保育実践とカリキュラム～環境・人とつながって育つ子どもたち～」
中央法規出版

72